

## はじめに

インターネットの「出会い系サイト」等での出会いに端を発する事件が問題になっている。オンライン上で見知らぬ者どうしが出会い、ネット上のみではなく、直接出会い、そして犯罪の被害に遭うという事件が報じられている。ちなみに、2001年10月22日にgooで「メル友」を検索したところ、6812 サイト、29728 ページのヒットがあった。ネット上にこれだけの「メル友」に関する情報が存在するのである。

今年度版の『警察白書』も、こうした事態に言及している。「…異性間の出会いの場を提供する電子掲示板、チャット等のいわゆる出会い系サイトが多数あり、好奇心からこれらを利用した女子少年が児童買春の被害に遭った事件もみられる。逆に、少年がインターネットを利用して詐欺等の犯罪を行う事件も発生している」（『警察白書』平成13年版 37頁）と。今年5月、京都でふたりの女性が連続して殺害され、容疑者の男性が逮捕されている。報道によれば、殺害された女性と容疑者の男性の接触は、いずれもメールでの出会いということである。

## パソコンでのメールから携帯メールへ :より軽く、より瞬時に

メールと言えば、ひところはパソコンによる通信手段であった。当然ながら、パソコンがあり、かつそれを使いこなせるのが前提であった。すなわち、メールという便利な道具を利用するには、一定の条件をクリアする必要があったのである。しかし、携帯電話にメール機能が付加されたことにより、事情は一変した。いまやかなりの高校生が携帯電話を所持し、メールをやりとりしている。電車の中で小さなディスプレイを覗きながら、なにやら一生懸命に指を動かしている若者を見ない日はない。ほんの数年前からのことではあるが、年輩の方はさぞかし不思議に感じたであろう。ひたすら指を動かすその動作は、若者にとって不可欠なコミュニケーションのひとつになりつつある。

もはやこうした情報化の進展をまるごと否定することはできない。インターネットに代表される情報インフラは、すでにこの社会を成り立たせる基盤の一部となっている。問題は、そうした情報ツールを、どのようにコントロールしたらよいのか、ということにある。

## 見知らぬ相手とメールを交換することの魅力

メールそれ自体は、たいへん便利な道具であることはいうまでもない。瞬時に届く。記録に残るからメモする必要がない。大学生の就職活動も、メールを使えることが前提となっている。現代人には不可欠な道具になりつつあるとさえ言えよう。ところが、新しい道具は、まったく予期されなかった使い道を生み出すことがある。見知らぬ他人と出会うための道具として利用されているのである。

なぜ、見知らぬ他人との出会いをもとめるのであろうか。こういう問いを立てた場合、えてして個々人の「内面」にその答えを求めがちである。朝日新聞（2001年10月10日朝刊）は特集記事で、3人の事例をあげ、このような小見出しを掲げている。「話を聞いて欲しい。一時避難所だった」（高校生・15歳）、「友達ができない。自分で誘ってみた」（予備校生・18歳）、「男にふられたから。労力に見合わない」（会社員・25歳）。いずれも女性である。確かに、個々の聞き取りからこのような「内面」の問題を引き出すことは可能であろう。

しかし、本稿では、高校生のどれくらいが、見知らぬ他人とメールの交換をしているのか、そして「メル友」のいる高校生はどのような特徴をもっているのかを分析していきたい。「なぜ」という問いに対して直截に答えるのではなく、メル友のいる高校生とそうではない高校生とでは「何が違うのか」を明らかにすることで、間接的に「なぜ」という問いへの解を出そうと試みるものである。

データは、平成12年度に総務庁青少年対策本部内に設置された青少年環境問題調査研究会（委員長：矢島正見中央大学教授）による「青少年と携帯電話等に関する調査研究」によるものである。この調査は平成11年11月から12月にかけて、宮城県、千葉県、東京都、石川県、奈良県、熊本県の6都県の高校2年生に調査票を配布し、3,101名から有効回答票を回収し、分析したもので、同研究会の学識経験者委員は、佐々木輝美（獨協大学）、田村雅幸（科学警察研究所）、耳塚寛明（お茶の水女子大学）、米里誠司（科学警察研究所）、著者の6名である。

調査時から2年ほどたっており、その時よりも携帯電話の普及はより進んでいるし、また携帯電話のメール機能の利用もより一般化している。状況はいくぶん変わっているであろう。だが、むしろこのデータは、初期のころから携帯電話やメール機能を利用している高校生の特徴をより反映したもので、つまり最初のころに新しいモノに飛びついたのはどのような高校生なのかを明らかにするのに適したデータと言えよう。

## 高校生の携帯電話利用

調査時点では、男子高校生の 49.5%、女子高校生の 67.9%が携帯電話（PHS を含む。以下同じ）を所持していた。全体では 58.6%となる。

携帯電話を所持している対象者のみに、1日にメールをどれくらいやりとりするかたずねたところ、「0回」という回答が 7.3%、「1～9回」が 41.8%、「10～19回」が 27.7%、「20回以上」が 17.4%となった（送受信を合わせた回数でたずねている）。すなわち、2年前の時点ですでに、携帯電話をもっていればメールを利用するのがごく当たり前で、利用しない者は1割に満たなかったのである。

メールをやりとりしているのはどんな相手か、をもたずねている。以下に「よくする」という回答と「ときどきする」という回答を足し上げた数値を提示する。「同性の友人」84.4%、「異性の友人」63.8%、「同じ学校の友人」78.5%、「ちがう学校の友人」70.3%、「家族」12.0%、「お店・チケット・会社など」1.8%となっており、メールはほとんど同世代の友人とのコミュニケーションに用いられていることがわかる。

そして、問題の「メル友」に一部該当する「番号は知っているが、会ったことがない人」とは、9.1%が「よくする」、16.4%が「ときどきする」と回答しており、計 25.5%となる。実に4人にひとりが、「会ったことのない人」とメールのやりとりをしていることになる。

もちろん、このやりとりの相手の中には、友人の友人といったような必ずしもまったく未知の他人とはいえない者も含まれるであろう。しかし、このデータから、メールのみでのやりとりする相手がいる高校生はけっして珍しい存在ではない、ということが明らかになった。

ここで私たちの調査による親からの自由回答をひとつ紹介しよう。「メル友、非通知電話にはくれぐれも関わりをもたないように話しをして、いつも注意をうながしている」。親自身もその危険性について認識していることがわかる一例である。世の中そうした親ばかりとは限らないが。

## 「会ったことがない人」とコミュニケーションする高校生

では、そうした高校生は、どのような特徴があるのかを以下にみていこう。「よく」と「ときどき」を合算した「会ったことのない人」とメールのやりとりを「する」群と、「ほとんどしない」群の2群を比較分析していく。携帯電話を所持しており、かつメールのやりとりについて回答している男子 716 人と女子 988 人の計 1704 人を分析対象とする。男子の

24.9%、女子の 28.9%が「会ったことのない人」とメールのやりとりを「する」群になる。性別での統計的有意差はみられないため、男女を一緒にして分析する。

仮説としてはこのようなことが考えられる。「現実の人間関係に何らかの問題があるため、メールというバーチャルなコミュニケーションにはまりこんでいく」のではないかと。いわば疎外論的な問題設定であり、「現実逃避モデル」と名付けられよう。まず学校への適応状況をみてみると、学校は「楽しい」という回答は、「する」群 49.8%、「しない」群 50.2%であった。まったく差がみられない。以下、成績、卒業後の進路希望も差がみられない。「フリーターをしてもよいか」という設問に対して「はい」と答えた割合が「する」群 53.4%、「しない」群 46.5%とやや差がみられるのみであった。

ついで、親との関係についてみると、「親は自分のことをわかってきている」「家庭のふんいきはあたたかい」「親とはあまり話をしない」かどうかでは、両群の間に差はみられない。かろうじて、「親のことを考えると悪いことはできない」と「思う」割合が、「する」群で 59.7%、「しない」群で 66.0%と、メル友がいる群の方が若干親の統制力が弱い傾向にある。

少なくとも、私たちの調査結果からは、学校への不適応、家庭での問題がメールでの出会いを求めさせているといったことは主張できなかった。してみると前に紹介した朝日新聞記事のような「さびしさ」や「内面」の葛藤に原因を帰責することは難しくなる。

### 「出会い」を求めて街もネットもふらつく高校生

しかし、「会ったことがない人」とメールするかどうかと、逸脱行動や若者文化との関係を見ると、意外に差異がみられるのである。例えば、ピアスをしたことがある割合は、「する」群 37.3%、「しない」群 29.7%である。アルコールを飲んだことがあるのは「する」群 81.5%、「しない」群 71.5%と 10 ポイントの差がつく。万引き経験があるとする割合も、「する」群 31.5%、「しない」群 19.4%。自転車盗・バイク盗の経験も「する」群 29.8%、「しない」群 21.1%となる。

さらに、見知らぬ他者との出会いという点で共通する、ナンパする／されるという行為（質問文は、「見知らぬ異性に声をかける／かけられる」にあてはまるかどうか）について分析したものが図 1 である。これについては男女によって能動的か受動的かという違いが大きいので、性別に分析した。【図 1 挿入】男子については差はないが、女子については 9.4 ポイントの差がみられる。また、このナンパされるという状況の前提となる、「繁華街

をふらつく」かどうかについても、男子「する」群 43.3%、男子「しない」群 31.4%、女子「する」群 49.0、女子「しない」群 33.3%と、大きな差がみられた。

こうした分析結果を踏まえると、先に検討した「現実逃避モデル」は妥当しないのではないかと思われる。すなわち、現実から逃げてバーチャルな世界に没頭する若者というよりは、活動的に街に出て若者文化と逸脱行動を謳歌する、いわば現実のストリートにいる少年の方が、「会ったことのない人」とメールでやりとりしているようなのである。

もちろん、単に見知らぬ人とメールのやりとりをするだけでは事件に巻き込まれる可能性は低い。相手に直に会う、という決定的な一歩を踏み越える必要がある。この調査では会うかどうかについては質問していないため、それは分からないが、相手に会うという積極的な行為が、どのような契機によって可能になっているのか、さらなる調査研究が必要であろう。

図1 見知らぬ異性に声をかける／かけられる

